

5 葦山城攻めの付城について

天正18年(1590)3月、豊臣秀吉は21万6千余の軍勢を率いて小田原城攻めを開始した。その進軍ルートは秀吉本隊が進む東海道と、上杉景勝・前田利家部隊が進む北陸の二方向からであった。さらに東海道を進軍する秀吉本隊は、山中城を攻める本隊と、葦山城を攻める支隊に分かれ、3月29日に城攻めが開始された。葦山城を攻めたのは織田信雄・蒲生氏郷・細川忠興・福島正則ら44,100人であった(『毛利家文書』「葦山城取巻人数書立」)。鍋島直茂に宛てた秀吉の書状に、「葦山之事、御人数三、四万にて被取巻、堀をほりまわし、堀棚を丈夫相付、鳥之かよひも無之被仰付候」とあり(『鍋島文書』)、豊臣軍は葦山城の周囲に付城を築いて包囲するという城攻めをおこなった。「小田原陣之時葦山城仕寄陣取図」(『毛利家文庫』山口県文書館所蔵)はこの攻城戦を記録した布陣図であり、そこには秀吉軍が葦山城の周囲に布陣した状況が詳細に記されている。

この秀吉軍の付城について実際に葦山城跡の周囲に遺構として残されていることを明らかにされたのは土屋比都司である。土屋は「小田原の役葦山城攻めとその陣城について」(土屋1999)、「伊豆葦山城とその付城・仕寄について 一天ヶ岳遺構群からみる戦闘の実態」(土屋2007)において付城の縄張り図を作成され、その在番についても比定されている。こうした土屋の一連の研究によって秀吉軍の付城の構造が明らかにされたとともに、秀吉の城攻めの実態も明らかにされたのである。

今回、『百年の計』を策定するにあたって、こうした秀吉軍の付城も含めて調査・研究が必要となり、平成25年(2013)2月10日に現地踏査を実施することとなった。付城は葦山城の背後にそびえる天ヶ岳の東側に向かい合う尾根の先端部に点々と築かれており、北側より、太閤陣場付城跡・本立寺付城跡・追越山付城跡・上山田付城跡・昌溪院付城跡と呼ばれている。このうち太閤陣場付城跡は、土取り工事による改変のため、遺構の残存状況は良好ではないが、その名称は土地宝典に太閤陣場と記されており、太閤の名称は古くより伝えられていたようである。一方、本立寺付城跡・追越山付城跡・上山田付城跡・昌溪院付城跡の名称は土屋によって付けられたものであり、これらは江戸時代以降すでに付城跡として認識されていなかったようである(註)。

しかし、伝承は残されていないものの、その遺構は戦国時代後半の攻城戦に構えられた付城の構造をよく伝えている。本立寺付城跡は、本立寺背後の七面山に構えられた付城で、その基本構造は土塁によって遮断線としている。七面山の南から西に向かう尾根筋と、北西に向かう尾根筋に「コ」の字状に土塁は構えられており、その全長は約500mにおよんでいる。本立寺から続く尾根筋では標高95m付近で尾根を切断する堀切を設けて、そこより高所に土塁を構えるという明確な城域を設定している。また、尾根上の頂部には土塁の墨線だけではなく、土塁囲いの曲輪を伴う小規模な城郭を設けている。「小田原陣之時葦山城仕寄陣取図」に記された位置関係から、この本立寺付城跡は「はちすか陣取」にあたり、蜂須賀家政の陣と考えられる。

本立寺付城跡の南西方向、葦山城天ヶ岳とは道を挟んだ対面に位置するのが追越山付城跡である。本立寺付城が土塁線であるのに対して追越山付城は平坦地を階段状に配置する構造の付城で、背面の尾根筋には鞍部を切断する堀切が設けられている。主郭には「L」字状に土塁が巡らされている。「小田原陣之時葦山城仕寄陣取図」に記された位置関係から、追越山付城跡は「あかし陣取」にあたり、明石則実の陣と考えられる。

この追越山付城の東方、標高187.4mの山頂に位置するのが上山田付城跡である。東西約80m、南北約30mの小規模な城郭であるが、その構造は葦山城攻めの付城群中、最も発達した城郭構造を示している。ここでも土塁線の付城ではなく、平坦地を設ける城郭構造となっている。その構造は「コ」の

字状の土塁を交互に組み合わせて、城内での直進を妨げるようになっている。

この土塁によって築かれた付城から派生する尾根には小削平地を階段状に設けている。これは防御施設であるとともに、将兵が小屋懸けした平坦地とも考えられる。天正8年(1580)から9年(1581)の羽柴秀吉はしほひでよしによる因幡鳥取城攻めに築かれた付城にも類似する小削平が延々と構えられており、付城構築を考えるうえで注目すべき遺構である。とくに南西方向に派生する尾根筋には小削平だけでなく、2本の堀切を構えている。このように上山田付城跡は戦国時代後半の最も発達した城郭構造を有していた。「小田原陣之時葦山城仕寄陣取図」には「あかし陣取」の南側、谷を隔てた尾根上に「まへの陣取」と記されていることより、ここには前野長康まえのながやすが布陣していたものと考えられる。

さらに上山田付城跡の南西方向に伸びる尾根の先端には昌溪院付城跡が構えられている。現在昌溪院の境内地となっているため、立ち入りには許可が必要であり、今回の予備調査では調査の対象外とした。土屋が作成した概要図によると、昌溪院を取り囲む「コ」の字状の尾根筋に付城が構えられおり、頂上部には曲輪を伴う小城郭が築かれており、それより南西に伸びる尾根上に小削平と、長大な土塁線を構える構造となっている。「小田原陣之時葦山城仕寄陣取図」には「まへの陣取」の南側、「ぬま田」を隔てた尾根上に「いこま陣取」と記されていることより、ここには生駒親正いこまぢかまさが布陣していたものと考えられる。

このように葦山城てんがたけの天ヶ岳に向かい合う東側の尾根筋には累々と秀吉側の築いた付城跡の残されていることが明らかとなったが、とくにその残存状況は良好で、戦国時代の攻城戦を見事に伝えている。こうした付城の調査は既往の遺構だけではなく、さらに広範囲で詳細な分布調査をおこなう必要がある。例えば今回の予備調査で、上山田付城跡と昌溪院付城跡の間の尾根鞍部を西川に下った谷筋の開口部で、谷を塞ぎ止める土塁を確認することができた。詳細については今後の調査を待たねばならないが、今回の踏査からは葦山城攻めに伴う秀吉軍の付城群の一部分ではないかと推定している。また、これまで知られていなかった葦山城西方の付城が土屋によって願成就院背後の尾根上で発見されており、守山付城もりやまつげじろとして報告されている。さらに土屋は北方の付城として函南町むかいほらつけじろで向原付城も発見されている。おそらくこうした遺構が山中に残されている可能性は高い。より詳細な分布調査が望まれる。

一方、昭和23年(1948)に米軍によって撮影された航空写真には、葦山城の西方の水田に、葦山城を囲い込むような楕円形となる細い水田が写し出されている(第53図)。おそらく秀吉側の包圍網として築かれた堀の痕跡を示しているものと考えられる。現存はしていないが、平地に築かれた築地、堀などの痕跡を写真や絵図などから探る作業も重要課題である。

さらにはこれまで秀吉軍の付城について、土屋や中井の作成した縄張図や概要図が公表されているが(土屋1999・2007 中井2006・2009)、あくまでも踏査した概要図であり、実測図ではない。今後早急に測量を実施し、正確な実測図を作成することが急務である。

ところで、こうした付城の評価であるが、戦国時代の攻城戦の実態を具体的に示す遺跡として貴重なものである。とくに豊臣秀吉による小田原城攻めについては、小田原城に対する付城として石垣山一夜城いしがきやまいちやは残されているものの、小田原城自体は近世に大きな改修を受けており、後北条氏時代の遺構は部分的にしか認めることはできない。両軍の城郭遺構がほぼ完存している葦山は稀有な事例である。攻城戦の場合、攻められた城には注目されたが、攻めた側については付城を構築したことは文書で確認されていたが、本格的な築城ではなかったと考えられていた。例えば天正6年(1578)から8年(1580)の播州三木城攻めの織田信長軍おだのぶながの付城については、昭和57年(1982)に刊行された『兵庫県の中世城館・荘園遺跡―兵庫中世城館・荘園遺跡緊急調査報告―』には、22ヶ所におよぶ信長方の付城跡の所在地が記載されているものの、遺構記述ではすべての付城跡で不明となっており、現地調査がなされていなかったようである。ところがその後の宮田逸民氏らの踏査により、数多くの付城跡に土塁や堀切の残

されていることが確認され、さらには包囲網としての多重土塁の存在も明らかにされた。その結果、平成25年には、三木城と付城群として、国史跡に指定された。包囲網による攻城戦の場合は、攻めた城だけでなく、攻めた側の付城も史跡として指定しなければ意味はないのである。

葦山城跡の整備とは、単に葦山城跡の整備だけではなく、その周囲に残された付城跡も含めて整備することによってはじめて整備といえるのである。さらにはそうした整備によって来訪者が戦国時代をよりリアルに体感できるのである。近い将来、葦山城跡や天ヶ岳より付城跡を望み、付城跡から葦山城跡や天ヶ岳を望める日の来ることを楽しみにしたい。

(中井 均)

註

ただし、土屋比都司は『古城』45号では、本立寺陣城、追越山陣城、上山田陣城、昌溪院陣城と呼んでいたが、『古城』52号では、「陣城とは本来、戦時に行軍し、一時的に駐留する場合にその宿所を臨時に城の構造に造るものであり、葦山城攻めには相応ではない」として付城に改められている。

参考文献

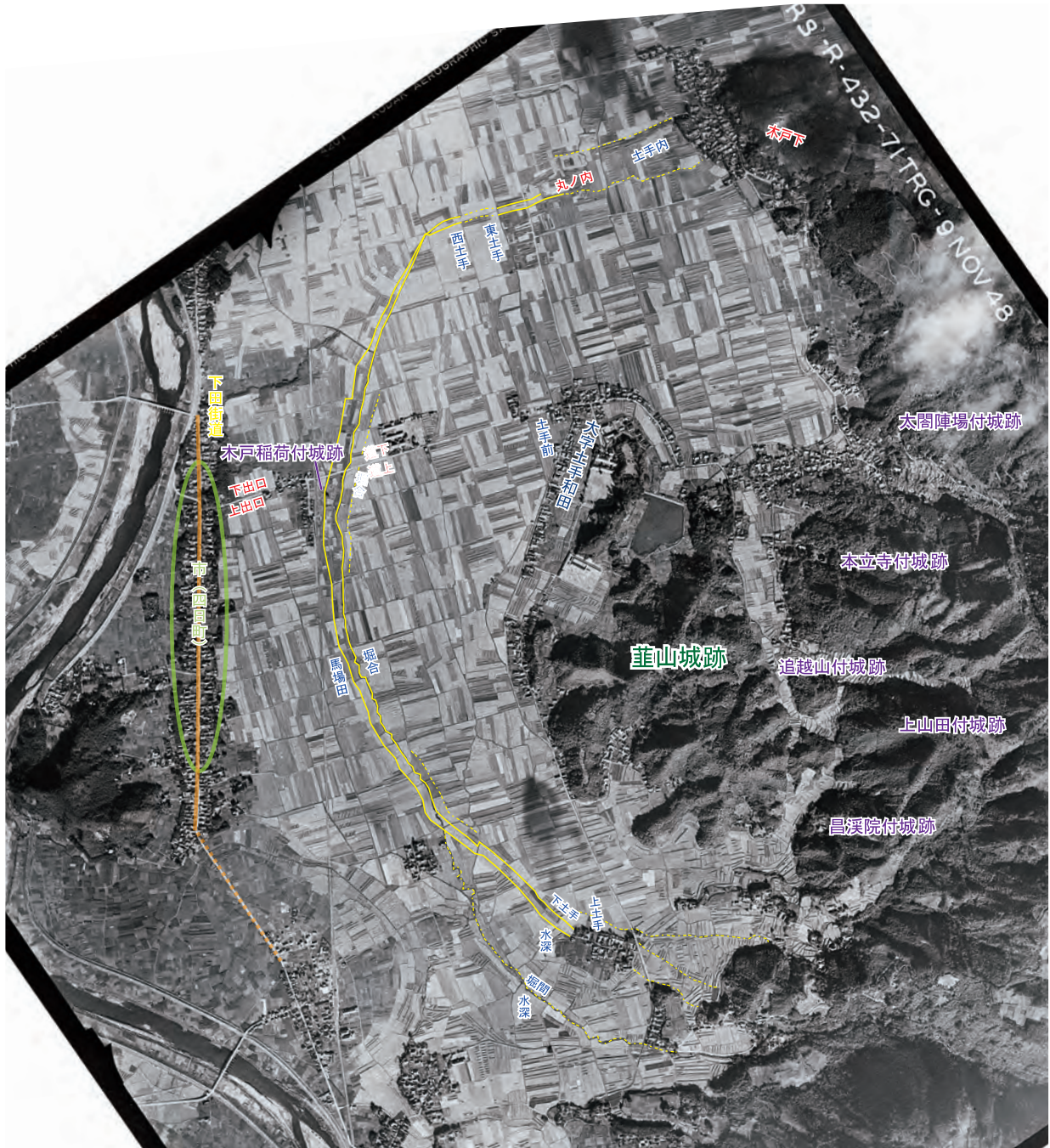
池谷初恵 2010 「北条早雲と葦山城」『鎌倉幕府草創の地—伊豆葦山の中世遺跡群—』新泉社

土屋比都司 1999 「小田原の役葦山城攻めとその陣城について」『古城』第45号 静岡古城跡研究会

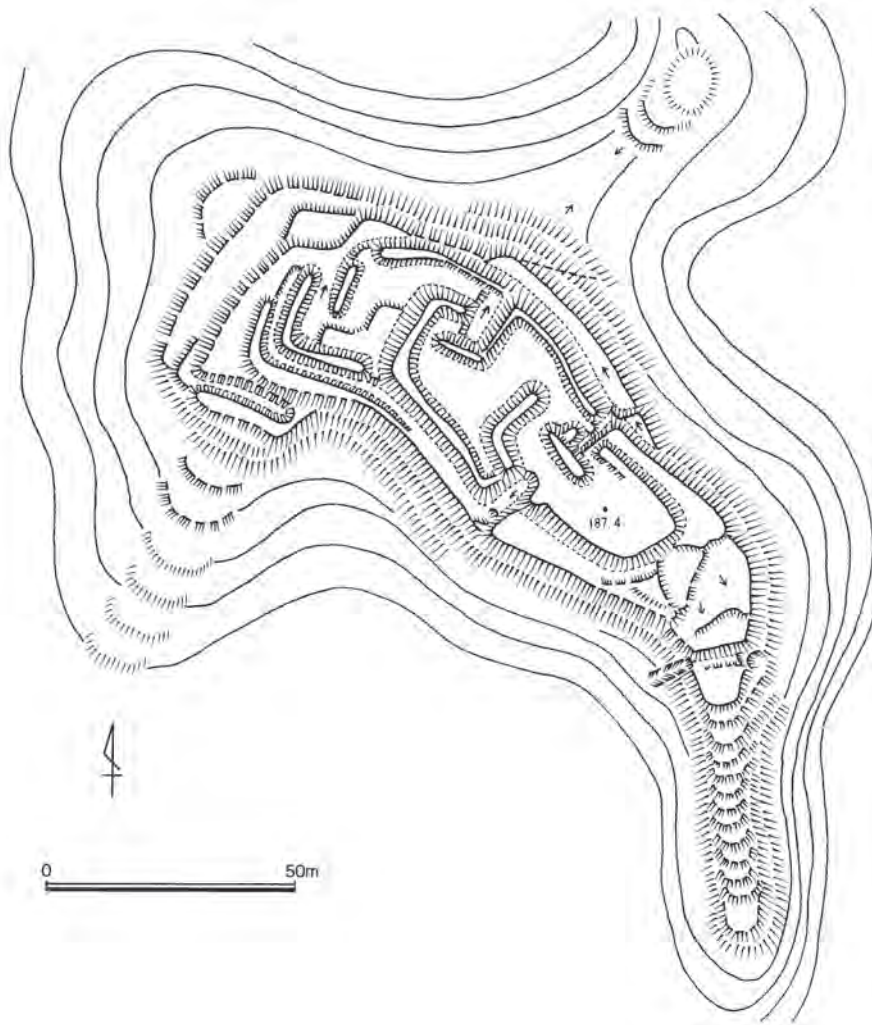
土屋比都司 2007 「伊豆葦山城とその付城・仕寄について—天ヶ岳遺構群からみる戦闘の実態—」『古城』第52号 静岡古城研究会

中井 均 2006 「葦山城包囲戦」歴史群像シリーズ『戦国の堅城Ⅱ』学習研究社

中井 均 2009 「上山田城」『静岡の山城ベスト50を歩く』サンライズ出版



第 53 図 葦山城跡を囲む堀跡と付城跡の位置 池谷 2010 掲載図に加筆・修正



第54図 上山田付城跡概要図 (1/1,500) 中井 2009より



写真40 本立寺付城跡土塁



写真41 上山田付城跡土塁

6 葦山城跡遺跡群をめぐる課題

はじめに

葦山城遺跡群について、多角的に論じてきた。もとより現段階での整理であり、今後の調査の進展により変更が生じるなど、調整が必要な点が多々あるであろう。しかし現段階においてさえも、いくつかの重要な点^{てんしやう}が確認された。戦国大名北条領国の起点を示すとともに、天正18年(1590)の戦場を空間的に表現し、戦国時代という日本史の時代画期を語っていた。そして後北条領国の境界にあつて戦国大名領国の構造をも示していた。このような戦国時代の各側面を語る重要な遺跡であるという評価である。今後には葦山城および付城群の性格について、さらに大きな可能性が期待しうる状況にあるように思える。

これらの視点を重視し、今後によりわかりやすく市民に提供することは大きな意味を持つ。随所で中世城館の調査及び整備の事業が行われているが、すでに過去の天守閣ブームにも似た、特徴をもたない我が町の遺跡的な調査整備が多くなりつつあるように感じる。葦山城遺跡群の場合、以上のような明確な性格を有する遺跡である。その特性を活かした、他の中世城館整備事業とは異なった事業展開が望まれる。そのためにも問題意識を明確に持った調査がまず期待される。

そこで現時点での当面の課題を列挙し、葦山城遺跡群の調査活動のための展望としたい。

(1) 葦山城跡の課題

① 文献資料調査の精査

まずは文献資料調査の精査である。静岡県史および葦山町史の編さんにより天正18年以前の史料については多くが集積されている。しかし、原本の性格について精査を必要とするものもあり、文献資料の内容把握について質を高める必要がある。

とりわけ、天正18年以降の内藤氏段階の史料調査の継続は重要課題である。

② 考古学的調査

次に考古学的調査の積み重ねである。

まずは既調査の報告書の刊行が期待される。本報告書によって未報告の地点の概要が明らかにされたが、^{よしいけ}芳池地点など正式報告が待たれる調査も少なくない。今後の検討に資するための条件整備が、より一層に求められている。

その上で国指定史跡の申請のための調査を実施する必要がある。学術調査によって遺構年代幅や範囲の調査が必要となる。想定される範囲内に発掘調査計画を立案して、調査を実施することが必要である。

その調査の進展のなかで、将来的に想定される整備の方向性を検討する必要もある。必要に応じて面的な調査を実施し、遺構の性格を解明する必要も生まれるであろう。具体的には、^{いせそうずい}伊勢宗瑞の屋敷地の特定などの居住区域の特定と解明が望まれる。

考古学的調査は、短期間の調査で完了するものではないため、より長期的・継続的な調査が計画され、実施されることが重要課題である。

③ 地名調査

地名の調査は、過去の研究において地籍図の検討が進んでいる。しかし扱った地図の年代が新しいなどの限界もある。よって調査の精度をあげて、明治期の書類や、^{けんちちやう}検地帳などの近世文書から通称地名まで含めて調査することが望まれる。後北条氏段階の代官所などの所在地や武家の居住地が地名として残ることは、^{いちじやうだにあさくらし}一乗谷朝倉氏遺跡の事例にあきらかなように、想定可能である。城下地区まで含めて調査

することが重要である。

同時に城下町地籍により、歴史地理学的な城下町の考察が行われる必要がある。地籍図はできるだけ古い図に準拠したい。

④ 周辺調査

葦山城の位置が後北条領国の幹線道との関係で重要であることが明らかになった。よって片浦口^{かたうらくち}の道筋の復原が行われ、周辺についても歴史地理学的に考察する必要が生まれた。

また、国清寺^{こくせいじ}周辺は葦山城以前に地域拠点^{こくせいじ}が想定されている場所である。この地区は後北条氏の時代においては職人集落とも考えられており、空間構造の解明が期待される。

これらのことは、葦山城遺跡群をより重層的に理解する糸口になり、将来的に遺跡を活用する際に重要な視点を提供する。

(2) 付城群の課題

① 範囲確認調査

現在、知られている6ヶ所の付城跡は埋蔵文化財包蔵地となっているが、発掘調査が行われたことはない。また、専門家による詳しい踏査は、一部の付城跡を除いて行われていない。まずは、表面観察による遺構の確認調査を行い、6ヶ所の付城跡の範囲を明確にすることが必要である。また、包蔵地範囲外に、付城に関連する遺構が残っていないか確認する調査も重要である。

② 測量調査

次に、①の範囲確認調査にもとづき、測量調査を行う必要がある。追越山付城跡^{おっこしやまつけじらあと}は、葦山城跡測量調査に併せてすでに測量が終了しているが、他の付城群は、葦山城跡と同じレベルの詳細な測量図が必要となる。測量調査とともに、後世の工事等による土地の改変なども確認していく必要がある。

③ 文献史料調査

天正18年の豊臣軍による葦山城包囲については、毛利家文書をはじめ、多くの史料が残されている。葦山城跡の文献調査と併行して、豊臣側の文書史料も網羅的に収集し、精査する必要がある。

④ 考古学的調査

遺構の性格や付城の構造を明らかにするための発掘調査を実施する必要がある。最近では、各地で付城の発掘調査が行われているが、東国においてはまだその事例はない。すでに調査されている他地域の付城の遺構と比較検討し、天正18年の豊臣方の付城構築方法の構造的な解明が行うことが望まれる。また、葦山城跡同様に、長期にわたる継続的な考古学調査が計画され、実施されることが重要課題である。

以上、繰り返しになるが、葦山城跡および周辺の遺跡群は単なる一般的な中世城館ではない。戦国大名後北条氏の領国を遺跡の視点から明らかにし、戦国時代のはじまりとおわりを語る遺跡である。この性格を踏まえた特徴ある事業展開が期待される。

(齋藤慎一 中井均)